輝ける王国の物語

zen

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
輝ける王国の物語

【Ｎコード】
Ｎ０４８７Ｏ

【作者名】
ｚｅｎ

【あらすじ】
深い霧に包まれた「霧隠れの森」。
その森をひた走る一人の少年がいた――

サービス終了、移管先未定（涙）の
ＭＭＯＲＰＧ「ブライトキングダム　オンライン」の二次小説です。

※２０１２／０１／０３（火）追記

移管先の運営会社が決まり、「ハンターキングダム」と名前を変えて、正式サービスが開始されました！

ブログで書いている作品を投稿することにしました。
ゲーム内の用語も多々出てきますが
プレイしていない方にも楽しんでいただけるよう
できるだけフォローしたいと思います＞＜

連載小説を書くのは初めてなので
至らない点も多々ありますが
楽しんでいただければ幸いです＾＾

走る少年とエルフの少女（1）

深い霧に包まれた「霧隠れの森」。
その森をひた走る一人の少年がいた。

時折、人間と同じ程の身長がある
二足歩行のネズミのモンスター「ラットマン」や
人間の子ども程の躯体に、背中に羽を生やした
妖精のようなモンスター「リトルグリンキー」を相手に
剣を振るっている。

木々が鬱蒼と茂った森を抜け、
視界が開けたところで少年は足を止めた。

「もう少しでエルドリンだ」

故郷ルーメンの村長ルメノスから
エルドリンの警備隊長シュティアンに
あるものを渡すよう頼まれていたのだった。

村を一歩出れば、凶悪なモンスターが徘徊する
危険な世界が広がっている。
少年は、将来少しでも村の役に立てるようにと
幼少の頃から剣の修行を積んできた。

そのお陰で、見たことが無かったモンスターにも
何とか太刀打ちできている。

休憩を終え、さあ進もうかと立ち上がろうとしたとき

背後の茂みから、「何か」が飛び出してきた。

「なんだっ！？」

驚いて振り返ると、弓に矢をつがえた一人の少女と
さっきまで自分が相手をしていたラットマンが
立っていた。

「やっ！」

少女がつがえた矢を放すと
矢はきらきらと光を放ちながら、
ラットマンに突き刺さった。

どうやらその一撃が致命傷になったらしい。
ラットマンは仰け反って地面に倒れ、動かなくなった。

「だ、大丈夫ですか？」

地面にへたり込んで息を切らしている少女に
少年は声を掛けた。

振り返った少女の外見は、
深緑色の瞳に亜麻色の髪が腰まで伸びており
顔の両側からは、長く尖った耳が天に向って伸びている。

（エルフだ）

村を歩いている冒険者の中に、時折エルフと思われる
姿を見かけることはあったが、間近で見るのは初めてだ。

「うん、大丈夫。ありがとっ」
少女は飛び跳ねて立ち上がり、
体や服に着いていた泥を手で払った。

どうやら怪我はなさそうだ。
少年は胸を撫で下ろした。

モンスターと戦っていたということは、
このエルフの少女も冒険者だろうか？
どこから来たのだろう？
自分と同じように何か目的があるのだろうか？
様々な疑問が少年の頭に浮かび上がったとき。

「ちょうどよかった」

少女は少年に向って声を掛けた。

「もし、時間があったらでいいんだけど。
手伝ってくれないかな？」
「えっ？」

いきなり手伝いを頼まれるとは思わなかった。

「いいですけど・・・何をすればいいんでしょう？」
「この坂を下った所にハーブがいっぱい生えてるんだよね～。
集めて来るように頼まれたんだけど、数が多いから人手があると助かるの」

少女はにっこりと微笑んだ。
ルメノスからの依頼に時間の指定はなかった。
暗くなるまでにエルドリンに着けば問題ないだろう。

「いいですよ」
「わ～ありがとう。助かるっ」

そう言うと少女は、自分が担いでいた鞄を下ろして
中から何種類かのハーブを取り出した。

「この黄緑の、セイジってやつと
　薬草は葉と根と幹と全部ね」

見本に、と一つづつ渡してくれた。

「あっ、大事なこと言うの忘れてた」

少女は胸の前で手を合わせ、少年に向き直った。

「あたし、ミトンっていうの。よろしくね」
「僕はパールっていいます。よろしくお願いしますね」

走る少年とエルフの少女（2）

お互いに自己紹介を終えた後、二人はハーブ収集を開始した。
この場所にはハーブが群生しているようだ。
見本に手渡してもらったハーブと見比べながら、
地面から抜き取ったハーブを鞄に詰めていく。

しばらくして、エルフの少女――ミトンが声を掛けてきた。

「ねえ、パールくんはどっちから来たの？」
「ルーメンって海岸沿いにある村です」
「あ～港があって、大きな船が止まってるんだよね。
まだ行ったことないな～」

ルーメンは規模としては小さいながらも港町として有名だ。
行ったことは無くても耳に挟んだことはあるだろう。

「ミトンさんは、どちらからいらっしゃったんですか？」
「そんなに丁寧に言わなくていいよ」

ミトンがくすっと笑う。

「あたしと歳は変わらないと思うし」
「じゃあ何歳なんですか？」
「・・・ナイショ」

女性に歳を訊くのも失礼だと思ったが
エルフが長命であることは有名だ。
外見は自分と同年齢に見えても

本来はずっと年上なのだろう。

しかし、気を遣って話していては疲れてしまうのは確かだ。
遠慮せずに喋ることにしよう、とパールは思った。

「あとどれぐらいで終わり？」
「ん～セイジがあと十本だね」

ミトンは立ち上がって、背筋を伸ばした。

「ずっとしゃがんでると疲れるね～。
パールくんも休憩したら？」

そうだな・・・と立ち上がろうとした瞬間。

「パールくんっ、うしろ！」

ミトンが驚いた表情でパールの後ろを指した。
振り返るとそこには、今まで何度も倒したラットマンと
同じ様相ではあるが何倍も屈強そうなモンスターが立っていた。

「ガアッ！」

モンスターは声を上げ、手にした斧を
パールに向って振り下ろした。

「わっ」

完全な不意打ちを食らったパールは
体勢を崩して、地面に尻餅をついた。

「早く立って！」

ミトンはすでに弓矢を構えて
迎撃体勢に入っている。

「いくよっ」

打ち放った矢はモンスター目掛けて軌跡を描き、
胸の辺りに深々と突き刺さった。
致命傷にはなっていないが、相手の動きを止めたようだ。

「今のうちに！」

パールは慌てて立ち上がり、剣と盾を構えた。

動きが止まっていたのは僅か数秒で、
モンスターはミトン目掛けて走り出してきた。
攻撃を仕掛けたミトンに照準を定めたらしい。
ミトンは次の矢を構えている。

いくら冒険者といっても華奢なエルフだ。
攻撃を受けてしまっては致命傷になる可能性が高い。

（この子を守らなきゃ！）

パールは焦りながらも、ルーメンで自分にファイターとしての
スキルを教えれくれた、スキルマスター・ルビのアドバイスを思い
出した。

（仲間とパーティーを組んでいるときは、まず敵にキックを浴びせて、
照準を自分に向けさせること！）

すでにミトンに向って走り出しているモンスターに対して
パールはキックを放った。

キックに気をとられたモンスターは
照準をパールに変更したようだ。

自分に向って走ってくるモンスターを見据えながら、次の手を思い出す。

（少しでもダメージを抑えたいなら、当身を食らわせて敵の動きを止める！）

パールは剣を振るう前に、思い切り踏み込んで
右肩から体当たりを食らわせた。
不意打ちを食らったモンスターは、よろけて仰け反った。

（最後は集中して、素早く剣を振るうんだ！）

構えた剣を左、右、左と薙ぎ払う。
ファイターが最初に習得する「トリプルヒット」という技だ。
敵の胴体に三太刀、切り刻まれた。

仰け反っていた敵が動き出したかと思った瞬間、また止まった。
モンスターの背中側から、ミトンが応戦してくれているらしい。

パール自身も敵の攻撃を食らいながら

当身と技を何度も繰り返す。
敵から受けた打ち身と切り傷で頭が朦朧としてきた頃。
「やあっ！」
最後に放ったトリプルヒットが予想以上の効果を与えたらしい。
敵は大きく仰け反って、どう、と地面に倒れこんだ。
「やったあ！」
ミトンは大きく飛び跳ねて、パールの元に駆け寄った。
「あいつ、強いんだよね～。あたしも何度も追い掛け回されたけど倒したことなかったんだよ。パールくん、すごいっ！」
ミトンが無傷であることを確認し、ほっとした途端、
パールは全身からの力が抜けて地面に座り込んでしまった。
「よかった・・・」
「パールくん、回復ストーンって持ってる？
あたしポーション切らしてるから、自分で回復してもらわないと・・・」
ようやく、自分が思った以上にダメージを受けていることに気づいた。
攻撃するのに必死で、攻撃をかわしたり、盾で受けたりする余裕がほとんど無かったのだ。
ミトンが焦っている傍らで、パールはすっかり放心状態になってい

た。
しばらく休憩していれば、動けるようになるだろうが
今のような敵がいつ襲ってくるとも限らない。
早く移動しなくては・・・とパールは考え始めた。

不意に、暖かな光がパールの体を包み込んだ。
同時に傷はふさがり、打ち身で青く腫れ上がっていた部分は
徐々に元の肌の色に戻っていった。

「お～い。そこの少年。大丈夫？」

声がした方を向くと、聖職者と思われる衣装を身に着けた女性と
長いローブを身に纏った男性――ミトンと同じように長い耳をして
いることからエルフと思われる――が立っていた。

走る少年とエルフの少女（3）

「はい。大丈夫です」

パールは立ち上がって答えた。

「今のは・・・？」

「こっちのお姉さんがヒールをかけてくれたのさ」

エルフの男性が気さくに答えた。

「ごめんね。もっと早く助けてあげれたらよかったんだけど。
今のヒールで勘弁して。ね？」

謝るかのように顔の前で手を合わせ、
パールに向ってウィンクした。

「勘弁も何も・・・回復してくださって、ありがとうございます」

パールは深々と頭を下げた。

「いえいえ。どういたしまして」

「お姉さんは辻ヒールがシュミだからね。お礼なんていらないって」

男性が横で茶々を入れる。

「さっきからお姉さんってねえ。あなたの方が遥かに年上でしょう
！」

女性がメイスで男性を殴る振りをした。
「あ～おっかない。少年も女には気をつけるんだぞ」
急に話を振られて、パールは困ってしまった。
やはり女性に歳の話をするのはよくないらしい。
それはよく分かったのだが。

「少年、さっきの戦いっぷりは立派だったぞ。
最初は手助けしようと思ったんだがそっちのお嬢ちゃんとの連携も
上手くいっていたからな。見守ることにしたんだ」

エルフの男性はミトンの方を見た。
こちらも急に話を振られて動揺したらしい。

「パールくんがすぐにタゲ取ってくれたんで助かりました。
あたしも打ち込みやすくなりましたし。
あっ、あたしはミトンっていいます。こちらはパールくん」

男性に受け答えしつつ、ミトンが自分を含めて紹介してくれた。

「俺はクラウっていうんだ。よろしくな。こっちのお姉さんは」

女性がじろりとクラウを睨む。

「っと、こちらのお嬢さんはミリアだ。俺たちはエルドリンから来
てたんだけどね」
「依頼も終わったことだし、街に戻るところだったのよ。そこであ
なたたちが
戦っているのを見かけて走ってきたの。ラットマンファイターは

結構強いからね」

二人とも心配して駆け付けてくれたらしい。

「これからどこに行く予定なのかしら？もしエルドリンに行くのだったら

私たちと一緒に行かない？」

ミリアが尋ねてくれた。

「僕はエルドリンに行く予定です。ミトンは？」

初めてこの子の名前を口にしたな、とパールは思った。

「あたし？あたしはウルガまで戻るよ」

「ウルガ！？」

ミリアとクラウが同時に声を上げた。

走る少年とエルフの少女（4）

「ウルガって・・・あのウルガかい？」

クラウが半ば呆然として、ミトンに尋ねた。

「ウルガって1つしかないでしょうから、そのウルガだと思います」

クラウの質問に、ミトンは一瞬きょとんとした。

そして、答えを続ける。

なぜそんなに驚かれるのか、腑に落ちないようだ。

「そんな遠い所から、1人で来たの？」

今度はミリアが尋ねる。

「エルドリンまでは、他の冒険者の人たちに連れてきてもらったんです。

何度か戦闘もありましたけど、ほとんど他の人たちがやっつけてくれてたんで・・・」

ウルガはエルドリンから「崩壊した監獄」と呼ばれる地域を抜け、さらに谷を渡った所にある山間の村落だ。

以前は戦争時の基地として使用されていたらしい。

とても強いモンスターが徘徊していると聞く。

まさかそんな場所から来ていたとは。

「それで、どうやって帰るつもりだったんだ？」

「ここでハーブを摘み終わったら、帰還書を使って帰るつもりだっ

たんだけど。
　うっかりおじいちゃんからもらってくるの忘れちゃって」
ミトンはぺろっと舌を出した。
一同、唖然。
「う～ん。俺達もウルガまで送っていけるほど強くねえからな」
「そうねえ。帰還書も持ってないから譲ってあげられないしね」
クラウとミリアも困っているようだ。
「とりあえず、エルドリンまで戻らない？
　帰還書が露店売りで出されてるかもしれないし」
「ウルガの帰還書なんて貴重品だろ？そんなにほいほい売ってる訳な・・・」
クラウの発言は途中で遮られた。
足を押さえて飛び跳ねている様子から、
ミリアが思いっきり脛を蹴り上げたらしい。
「何するんだ！この凶暴クレが！」
「あ～ら。ケガしたらヒールで治してあげるんだから、問題ないでしょう？」
女性だけではなくクレリックも怒らせると厄介なのかもしれない。
パールは新しい知識を得た気分になった。
「パールくん、セイジあと１０本残ってるんだけど」
「そうだね。１０本集めるまでにはあっちの追いかけっこも終わってるだろうし」

クラウとミリアのじゃれ合いを横目で見ながら
2人はハーブ集めを再開した。

城塞都市エルドリン（1）

４人はエルドリンを目指して霧隠れの森を進んだ。

いつまたモンスターに襲われるかとパールは緊張していたが、
パールやミトンが手を出す暇もなく
クラウとミリアは次々にモンスターを倒していった。

特にクラウの魔法の威力は凄まじく、
数体のモンスターを同時に倒すこともあった。

ミリアはクラウを回復しつつ、
メイスを手にモンスターを殴り倒していった。

「すご～い！」

ミトンはクラウの魔法の威力に見惚れ、拍手を送っていた。
パールも魔法が放たれるのを傍で見るのは初めてだった。
クラウが杖を構え、呪文らしき言葉を口にすると
光の矢や氷の弾が手から生まれ、モンスター目掛けて放たれる。
次の瞬間には、ほとんどのモンスターが倒れていた。

「魔法って、すごいんですね！」

パールも感嘆の声を漏らす。

「これぐらい、どうってことないって」

クラウは謙遜しているが、褒められてまんざらでもないようだ。

「僕、メイジさんが魔法使っているところを初めて見ました」
「そうなのか？」
「メイジさんに限らず、ですけど。
他の冒険者の人たちと一緒に戦うのって初めてだから」
「そうか！じゃあ次はもっとすごいのを見せてやるぞ！」
「あのねえ、この辺りのモンスターなんて
あなたにとって弱くなっちゃってるんだから。
もうちょっと手加減しなさいよ」

ミリアが注意した。

「いいじゃないか、少しくらい」
「何も考えずに突っ込んじゃって。
少しはサポートする方のことも考えてよね！」

そう言われてクラウは少し不機嫌になったようだ。
しかし、ミリアはサポートする側の負担について苦言を呈しているのではなく、
単純に、クラウの体を心配しているようだった。
クラウは「メイジは紙だから」と自分の防御力の低さを皮肉っており、
先程の戦闘でもいくらかの傷を負っていた。
自分より弱い相手でも、複数に囲まれては無傷では済まないようだ。
ミリアのサポートがなければ早々に倒れていたかもしれない。

しばらくして、思い直したようにクラウが言った。

「はいはーい。クレリック様のご忠告は有難く頂戴しておきますですよ」

「もー、ホントに分かってるのかなあ」

二人のやり取りを聞きながら歩いていると、突然ミトンが声を上げた。

「あっ、エルドリンの門、はっけ～ん」

城塞都市エルドリン（2）

エルドリンは堅牢な城壁に囲まれた街だった。

街を歩く人々には冒険者と思われる格好をした者が多い。
光輝く武器や盾を手にし、頑丈そうな鎧に身を包んだ者。
煌びやかな衣装を纏い、珍しい装飾品を身につけた者。

各々が思い思いに、冒険者同士で談笑したり
街中の広場に戦利品を広げ、露店商として売り出したりしている。

陽は完全に落ち、そろそろ夜になろうとしていたが
その賑やかさが収まることはなさそうだった。

ルーメンの静けさとは違い、その騒々しさに圧倒されたパールは
街に着いてからきょろきょろと辺りを見回してばかりいた。

「どうしたの？」

パールの落ち着かない様子に気づいたミリアが訊ねてきた。

「いや、あの。今日はお祭でもあるんですか？」

故郷のルーメンがこれほど賑わうのは、年に数回の祭の時ぐらいだった。

「今日は特に何もないけど。いつもこんな感じよ」

ミリアは笑って答えた。

「いつもこんなに賑わってるんですか！？」
「そうよ。夜になると冒険から戻ってくる人たちもいるからね。
これからもっと、騒がしくなるんじゃないかしら」
「へえ…」

行き交う人々、露店に並べられた品物の数々。
パールにとってはどれもが新鮮だった。

「ねえ、パールくん。お使いに行かなくていいの？」

露店の品物を見ていたミトンが聞いてきた。

「あっ、そうだった」

パールはルメノスに頼まれていた言伝を思い出した。

「僕、これからシュティアンさんの所に行ってきます」
「そうだったな。じゃあそろそろ宿を決めておくか」

クラウは辺りを見回した。

「じゃあ、あそこの「踊る子馬亭」って所に部屋を取っておくから。
用事が終わったら来いよ」
「あたし、もうちょっと露店見てくる～」
「私も、アボンさんの所に行ってくるわ」

４人は宿の場所を確認し、それぞれ目的の場所に向かった。

城塞都市エルドリン（3）

「パール、ご苦労だったな」

エルドリンの警備隊長シュティアンはパールを労った。

「いえ、とんでもない。遅くなってすみませんでした」

パールは頭を下げた。

「元々、時間など決めておらんかったからな。無事に来れて何よりだ」

シュティアンはそう言って目を細めた。
真紅の甲冑に身を包み、よく日焼けした浅黒い肌を見せている。
歳は４０台後半といったところか。
甲冑から伸びる引き締まった手足からは、歳を取ってなお現役であろうとする
心意気が伺える。

エルドリンの城内には、城を警護する隊員たちの待機場所として
詰め所が設けられていた。
その一角に警備隊長シュティアン用の執務室があり、
彼は見回りの時間以外は執務室で過ごしているらしい。

ルーメンの村長ルメノスからシュティアンに渡すように頼まれていたのは、
鷲の翼を象った銅製の紋章であった。

「シュティアンさん、この紋章はどうするんですか？」
「ふむ。これはな」
シュティアンは机の引き出しから、小型のナイフを取り出した。
紋章を裏返すと、ナイフでかりかりと削り始めた。
「えっ、何を…」
驚いているパールを尻目に、シュティアンは作業を続けた。
「こうするのだよ」
紋章の裏側を、パールに向けた。
「あ…」
そこには、パールの名前が彫られていた。
「ルメノスに予め頼んでおるのだよ。もし、冒険者を目指す若者が現れたら、
私の所へこのシンボルを届けるよう依頼するように、とな」
シュティアンは別の引き出しを開けた。
そこには、パールが渡したものと同じ紋章がいくつも詰め込まれている。
「この依頼を出すようになってから、何年が経ったかな。
冒険者を目指すといっても何から始めてよいか分からない者も多いようだ。
そこで、ルメノスと相談してこの依頼を始めたのだよ。

このシンボルを持ってルーメンからエルドリンまで旅をすることで、
冒険者としての自覚と自信を持ってもらおうと考えたのだ」
そんな意図があったとは。パールは考えもしなかった。
「もちろん、運良く帰還書を手に入れて、労することなくこの街に辿りつく者もおる。
この依頼を受けずに名を成す者もおる。もちろん、苦労の末に私の元へやってくる
者も多い。人それぞれだ」
シュティアンはパールに向き直って言った。
「パール、お前はどうだった？」
シュティアンに訊ねられ、パールはこの数日間を振り返った。
初めてルーメンから外に出たこと。モンスター相手に剣を振るったこと。
森の中で一人夜を過ごしたこと。クラウやミリアとの出会い、そして。
「ほんの数日でしたが、とても勉強になりました。それで」
パールは言葉を区切った。
「もっと強くなりたい、と思いました」
パールの瞳には意志を秘めた輝きが漲っていた。

ラットマンファイターからミトンを守ろうとした時に初めて思った。
誰かを守るために強くなりたい。もっと、もっと。

「うむ。それでよい」

シュティアンは満足そうに頷いた。

「始めから強い者などおらぬ。みんな努力して成長していく。
強くなろうとする意志が、大事なのだよ」

「はい！」

パールは元気よく答えた。

「そして、もう一つ大事なことがある」

シュティアンは椅子から立ち上がると、パールの肩に手を置いて言った。

「仲間と協力することだ。最初は自分より強い者に守られるばかりであろう。
歯がゆい思いをすることもあるかもしれん。
でも、一人で何でもしなければいけない訳ではない。
どうしてもできない時は、誰かを頼ってもよい。
その分、誰かを助けられるように強くなればいいのだからな」

パールは強く頷いた。

「よし。一度ルーメンに戻って、ルメノスに報告してやるとよい。
あいつも喜ぶだろう」

「はいっ！ありがとうございました！」

もう一度深く礼をして、パールはシュティアンの屋敷を後にした。

「また一人、冒険者が誕生したな」

パールを見送りながら、シュティアンは目を細めてつぶやいた。

城塞都市エルドリン（3）（後書き）

■ライナーノーツ

この話はゲームに実存したクエスト「新しい称号［1］」を元にしています。
上にあるようにアイテムを渡しに行くクエストなのですが、
なぜそんなクエストがあるのか自分なりに考えて
小説に組み込んでみました。

ゲームとかけ離れた内容よりも
プレイヤーさんたちに「ああ、こんなことがあったなあ」
と懐かしく思ってもらえるよう内容にしたいなあと思っています＾
＾

城塞都市エルドリン（4）

「おっかえり～」

ルメノスからの依頼を終え、「踊る子馬亭」を訪れたパールをミトン、ミリア、クラウの三人が迎えた。
陽は完全に沈み、街に戻ってきた冒険者たちで宿の酒場はごった返していた。

「パール君、どうだった？」
「はい。無事に終わりました」

ミリアの問いかけにパールは答えた。

「そう。これでパール君のほうは一安心ね。
喉渇いたでしょ？　メニューどうぞ」

そう言いながらミリアが食事のメニューを渡してくれた。

「えっと・・・あれ？」

他の三人は何を飲んでいるのだろうとテーブルの上を見渡して気がついた。

「クラウさん、お酒飲んでるんですか！？」

クラウの手元に置かれているグラスには泡の出ている
・・・おそらく麦酒と思われる液体が注がれていた。

「なんだよ。飲んじゃいけないのかよぉ」
若干、顔が赤らんでいる。呂律も少し怪しいようだ。
「いいじゃないか、一仕事終えて飲む一杯は格別だよお」
嬉しそうに言って、グラスの液体を飲み干した。
「ほらほら、子供の前で飲みすぎないでよ」
すかさずミリアから注意が入る。
「パールくん、気にしないでね。この人いつもこうだから・・・
あー、ミトンちゃんも飲んじゃだめよ」
「ええ～そんなあ」

ミリアの前にあったグラスに手を伸ばそうとしていたミトンを牽制する。
ミトンもそうだが、特にクラウと出会ってから、それまでパールが抱いていた
エルフに対する高潔なイメージが音を立てて崩れ去っている気がする。

「ミリアさんは飲まないんですか？」
「私はちょっとだけ。二日酔いになっても困るし」
ミリアは苦笑した。
「もしかしたら二日酔いになっている誰かさんに、
キュアかけてあげないといけないかもしれないからね」

「・・・キュアって何にでも効くんですね」

モンスターから受けた毒などを治療するためのスキルなのだが。
人間の――クラウは少し違うが――諸症状にも効くのだろうか。

「ほらほら、パールくんも早く注文しなさいよー」

ミリアからグラスを取り上げられ、
ふくれていたミトンが痺れを切らして声を上げた。

「じゃあ、みんな揃ったところで」
「かんぱーい！」

城塞都市エルドリン（４）（後書き）

■ライナーノーツ

冒険を終えて街に戻り仲間との団欒のひと時。
実際のＭＭＯＲＰＧではなかなか無い光景なのですが、
銀行や倉庫の前で荷物整理しつつ
フレさんとおしゃべりすることはよくありますねｗ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0487o/

輝ける王国の物語

2012年1月14日02時50分発行